

追 悼

追悼 — 野口眞先生 —

柴田 弘捷（社会科学研究所所長）

野口眞先生が急逝された。一度入院され、手術が成功し、退院されたと伺い安堵していた矢先である。え！、どうして！、驚きに耐えません。

野口先生は、98年に所員になられ、99年度から、事務局に入られ、研究会担当として、定例研究会はもとより、夏期、春期の合宿研究会、二度の春期海外視察（北京大学学術交流会・大連視察〈2001年3月〉、雲南大学学術交流会・昆明視察〈2003年3月〉）の企画・開催に多大の貢献をされた（北京大学学術交流会では「アジア経済危機以後の日中経済協力を展望して」と題する報告も行っている）。

私は学部も違い、社研事務局から離れていた時期であったため、野口先生との交流は夏・春の合宿研究会でお会いする程度であったが、長野県上田市・長野市で行われた2001年度の夏期合宿研究会での氏の鋭い発言は印象深いものでありました。

先生のあまりに若すぎる死は、ご自身にとってもただただ無念の思いを残されたままであろうと推察されますが、社研にとって大きな損失です。特に所長となった私にとっては、今後の社研の運営にとって重要なパートナーとなってくれるべき人を失ったことになり、まことに残念の思いがまだ消えません。

とは言え、もはや詮無いことであり、せめて今後の社研の活動を活発にすることを誓い、野口先生のご冥福を祈るしかありません。合掌。

野口 眞所員の逝去を悼む

古川 純（前社会科学研究所所長）

4月2日に社研事務局・竹内さんから神田研究室への第1報連絡で知らされた野口 眞さんご逝去の報は、まったく信じがたいことでした。本当に絶句しました。実は恒例の2002年度社研海外調査（中国・雲南大学等訪問）から帰国後、黒田彰三前事務局長と連絡をとりあって、退院後の野口さんをお見舞いしながら帰国報告をするつもりだったからです（野口さんはもとより研究会担当として、1月初めまで今回の海外調査と一緒に企画してきましたが、入院・手術のため調査参加はキャンセルされました）。

野口さんは、私が社研所長に就任した1999年4月から事務局研究会担当を務められ、社研50周年記念シンポジウムの企画・司会をはじめ、2001年3月の北京大学学術交流（報告者）・大

連調査や7月・3月の国内合宿調査研究会の企画・運営と、まさに八面六臂の活躍でした。実にアイデア豊富で、困難さなどは例の如く快活に笑い飛ばす方でした。日本とアジア、特に中国との関係がいかに重要性を増すか、したがって専修大学（社研）と中国の大学との今後の学術交流をいかに大事に考えなければならないか、大胆な予想を立てながら強調力説されていたのが忘れられません。在外研究からの帰国後は経済学部のみでなく社研の屋台骨を支えるはずの方でした。心よりご冥福をお祈りいたします。

未完の意志

石塚 良次（事務局員）

それまで面識のなかった野口さんに初めてお手紙を差し上げたのは、90年代の初め頃でしたか、小さな雑誌の編集委員をしていたときに原稿を依頼したのが最初であったように思います。そのころ彼はすでに気鋭の研究者として確たる地歩を築いておりました。その後、私が在外研究で英国に出かける際には、その編集委員の後継を野口さんに御願いし、快く引き受けていただきました。

専大に来てからの野口さんは、もちまへのエネルギッシュな性格を研究活動ばかりではなく、様々な学内行政にも発揮し、経済学部のなくてはならないスタッフの一員となりました。

野口さんが志したのは政治経済学の再興でした。硬直化して教条と化したマルクス経済学は現実を説明する力を喪失していました。しかし、新古典派経済学を主軸とする主流派経済学に与したところで、資本主義発展のダイナミズムを解き明かすことはできない。ではどうすればよいか。マルクスに依拠しつつ、その認識枠組みを組み替え、現代資本主義を分析する確固たる足場を築くこと。その未踏の地を彼は目指しました。

有効需要の原理をケインズに先駆けて「発見」したカレッキーは、利潤が投資される、というマルクスの論理に対し、投資が利潤を生み出す回路を、他ならぬマルクスの再生産表式の読み替えによって導出しました。野口さんがカレッキーに大きな示唆を得たことは間違いありません。私から見れば、彼は自称マルクス主義者のポスト・ケインジアンでした。彼の抜けた後は当分の間空席が続くでしょう。政治経済学再興の目途がすこし遠のいてしまったように思います。

野口眞さんのこどもぶり

宮崎 晃臣（事務局員）

社研の実態調査で、野口さんとは2000年度春の北京・大連以来4期連続してご一緒させていただきました。昨年度春の雲南調査では、入院され、ご一緒することがかなわなかったのですが、せんだって野口さんの研究室で昆明の西部開発区をテーマにした収集資料を発見し、野口さんの学問的関心の広さと責任感の強いお人柄をあらためて識るところとなりました。

一昨年度春の実態調査で地域通貨おうみ委員会を訪問した際に、所員数名がロールプレイングにかり出され、その折野口さんが地域通貨を使うこどもの役回りを担当されました。「うーん、ボクね」と例の高い声できりだされ、カイラシイこどもになりきっている野口さんを拝見し、四六時中経済学のことばかり考えている野口さんのもう一面をみることができました。たぐいまれな理論性だけでなく、こうしたお茶目なところも多くのファンを引きつける野口さんの魅力だと思われれます。ゼミ生が野口さんのことを慕っておりますのも野口さんのこうしたお人柄故だと思われれます。ご冥福をお祈りいたします。

野口眞さんが遺したもの

内田 弘（葬儀委員長）

来年早々、私は短期留学でイギリスに出かけます。その目的のひとつは、経済学史学会がシリーズで出している「英文論集」の「第4集 マルクス」の編集者としてラウトレッジ社の編集者打合わせすることにあります。野口眞さんはその論集に「マルクスとケインズ」というテーマで論文を寄稿してくれました。「寄稿者の中で一番早く原稿を送ってくれた人は、野口さんです」とお礼をいうと、野口さんは「世界の学会に論争を挑んだ原稿だよ」と微笑んで応えました。野口さんは私より少しあと、イギリス留学に出かける予定でした。これまで発表してきた論文を集成し英訳する計画を野口さんは楽しげに語りました。パブで、野口さんと色々語りあうことを楽しみにしていたのです。いまや、せめて、野口さんの遺稿のために、イギリスに旅立とうと思っています。合掌。